

14) ヤマモモ＝山桃／楊梅

ヤマモモはヤマモモ科の常緑高木で、本州中部以西の四国、九州、沖縄などの海岸近くの温暖な地方に自生する。最近では庭木としても人気があり、公園樹や並木としてもあちこちに植えられている。高さは15mに達し、葉は互生し小枝の先に集まってつく。春先、葉腋に花弁のない単性花の集まった尾状の花穂をつける。雌雄異株で雄花穂は黄褐色、雌花穂は緑色の苞鱗内に一個の花がある。果実は直径1cmほどの球形の核果で、6～7月頃に熟すると美しい紅紫色となる。和名の起こりは山地に生える桃の意で、果実の味が桃に似ているためという説、山桃の桃は百百で山に生え、実がたくさん成るためとする説、中国名の楊梅の発音が『yam mei』であるところから、これがヤマモモになったとする説など、諸説がある。別称としてはモモヤマ、モモノキ、ヤマモモノキ、モキ、ヤمامなどである。学名は『*Myrica rubra*』で、属名は芳香、香料を表わすギリシャ語に由来し、種小辞は赤色という意味で、果実を形容したものである。

ヤマモモの熟した果実は甘酸っぱくて生食することができる。またジャムや果実酒などにすると、さらに香り高く食用にすることができる。材は木製のボタンを作ったり、細工用に用いたりするが、多くは薪炭などにする。樹皮を乾燥させたものを漢方では『楊梅皮』(ヨウバイヒ)といい、下痢や打撲傷などに煎服し、湿疹、かぶれには外用する。またヤマモモの樹皮は染料としても用いられ、魚網などを染めるのに利用されていた。種々の媒染剤により茶、黄、黄金、褐色、緑黒色などに染まり、媒染剤を変えることにより、色を変えることができたから、たいへん便利な染料でもあった。

『倭名類聚鈔』では『爾雅』(ジガ)の一説を引用して「楊梅は莓の如く赤い色をしており、甘酸っぱく食べることができる」としている。また『枕草子』の「見るにことなることなき物」の中では

見るにことなることなき物の文字にかきてことごとしきもの覆盆子(イチゴ)。鴨頭草(ツユクサ)。水苺(ミズフグモ)。蜘蛛。胡桃(クルミ)。文章博士(モンジヤウカセ)。得業(トクガウ)の生(シヨウ)。皇太后宮権大夫。楊梅。いたどりは、まいて虎杖(イドリ)とかきたるとか。杖なくともありぬべき顔つきを。

と記している。これは後述する胡桃(04-02-03)のところでも引用しているので、詳しい説明は省くとして、楊梅の文字が実際の木の姿よりも、仰々しいといっているのである。

ヤマモモを含んだ言葉には面白いものがある。「山桃の選り食い」というもので、その意味は、初めは良さそうなものから選んで食べるが、次第に少なくなってくると選り好みをしなくなり、結局は一つも残さず食べてしまうということで、転じて、遅かれ早かれ、帰すべきところは同じであることの例えとして用いられる。

都営地下鉄御成門駅の上の芝公園には、毎年よく実をつけるヤマモモの木がある。また最近では都内のみならず、あちこちにヤマモモの並木道が生まれている。



聖路加病院前のヤマモモの並木道。度々この道を通ったが、果実がなっているのを見たことがなかった。雌雄異株で、ここに植えられているのはすべて♂木だったらしい(東京都中央区)。



若い果実、まだまだとても食べられる代物ではない(東京都港区芝公園)。



美しく紅熟した果実。公園や並木道によく植えられる植物である。しかしこの実のおいしさを知らない人がほとんどで、よく路面でつぶれているのが残念である(東京都港区芝公園)。



完熟してくると黒味を帯びてくる。こうなると食べ頃は近い(東京都港区芝公園)。

[目次に戻る](#)